

育教材「4つのおさら」のランチョンマットを使用することにより4種の料理形態を有意に選択できた。食育は、生涯にわたって健康な生活を送る上で基礎となり、望ましい食習慣を身につける第一歩である。4種の料理形態を理解し、バランスの良い料理を選択する力を身につけることを目的とした料理選択型食教育を行うことによって、幼児に行動変容が見られたことは幼児の正しい食習慣の形成に有効であるのではないかと推察される。

さらに、味覚の発達が未熟でありこれから味覚が形成されていく重要な時期である幼児期に焦点をあてて味覚教育に関する研究を行った。その中では、幼児期に楽しく味覚教育が行えるようなカリキュラムの作成も研究課題とした。カリキュラムを作成するだけでなく、作成したカリキュラムを実施した。実施した本研究のカリキュラムは、①五感で感じてもらうために、味の体験をさせた。②感じた味の表現を1人ずつさせた。③味の体験は、繰り返し実施した。W 保育園の4歳児、5歳児は、甘味についてはよく理解をしていた。塩味については、すっぱい味と感じている子どもが多く、しょっぱい味とすっぱい味の区別が難しいのではないかと感じた。酸味については、表現できない子が多かったが教育を重ねた結果、すっぱいと表現できる子が増えた。苦味については、コーヒーとは表現できるのが苦味という表現が最初はできなかった。その結果、味覚識別能調査では、認知閾は年長になるにつれて低下した。特に酸味と苦味において低下の傾向が見られた。刺激閾と認知閾の差は、年長になるに従い小さくなっていく。味覚識別能調査では、年長・年中児とも食育介入後敏感になり、さらに閾値の刺激閾と認知閾は教育後で差が少なくなる傾向がみられた。

現在の食環境においては、調理済み食品の使用は避けて通れないものがある。その多用によって微量栄養素が不足し、その結果味覚感度が低下するという報告も散見されている。子ども達を取り巻く環境も成人と同じものがあり、それらが子どもの食に問題を生じている。味覚および嗜好と食生活の間には密接な関連があることは多くの研究で明らかでもある。

以上のことから、生活習慣の確立する幼児期から様々な食体験をすることで、味覚形成を促すと考えられ、幼児への味覚教育は大切である

と考える。幼児期における食教育の一つの教育方法としては、味覚教育の歴史はまだ浅いが、今後とり組まなければならない課題である。

これら小児期から健康的な正しい食習慣を身につけ、生活習慣病やがんの発症を効果的に予防するための食の営みである実践的な食育を行うことが、幼児の味覚識別能にどのような影響を及ぼすのか、調査結果に基づき、検討を重ねていく。

#### E. 結論

この結果が、幼児期からの健康増進活動のあり方について、低年齢化する生活習慣病・がん対策のひとつのガイドラインともなり得るよう実践的な取り組みを充実させ、今後調査に基づいた検討を重ねていく。

#### F. 健康危険情報 なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

吉田隆子、地域と連携した学生による食育支援プロジェクトのシステムの構築と取り組み、第68回日本公衆衛生学会、2009

吉田隆子、味覚の発達と食行動、日本生理人類学会第61回大会 シンポジウム、2009

分担課題名 がん患者のQOL向上に関する心理学的研究

研究分担者 小池 眞規子 施設名 目白大学 職名 教授

#### 研究要旨

小児がんと診断された子どもの70%以上においてその治癒が期待できるようになっているが、晩期障害を経験する子どもも多く、身体的のみならず、心理・社会的な生活の質(Quality of Life: QOL)を損ねる要因となっている。

本研究は、国際的に比較可能なQOL評価尺度により、小児がん経験者を対象として評価を試み、治療中のみならず、小児がん経験者の治療後の成長・発達の過程を含めた長期的視点に基づくQOLの保持・向上を重視したフォローアップ援助システムを構築するための基礎データを得ることを目的とする。

#### A. 研究目的

小児がん経験者について、治療中のみならず治療後の成長、発達過程におけるQOLの保持・向上を重視したフォローアップ援助システムを構築するための基礎データを得る。そのために、小児がん経験者のQOL評価尺度としてMinneapolis-Manchester Quality of Life Survey of Health(MMQL)の日本語版を作成し、その信頼性および妥当性を検討する。

#### B. 研究方法

1) 対象は、①小児がん経験者群:治療終了後1年以上経過観察中の小児がん患者で、MMQLオリジナル研究に準ずる条件を満たし、かつ本研究への協力を得られた13歳以上19歳未満のもの②対照群:MMQLオリジナル研究に準ずる条件を満たし、かつ本研究への協力を得られた13歳以上19歳未満の小児がん他慢性疾患を有しないものとする。

2) 本人および保護者による研究への同意が得られた対象者に対して、以下の評価尺度による無記名自己記入式質問紙への回答を依頼する。

①Minneapolis-Manchester Quality of Life Survey of Health (MMQL) 日本語版

本尺度は、8歳から12歳用(MMQL-Youth Form、以下MMQL-YF)と13歳から20歳用

(MMQL-Adolescent Form、以下MMQL-AF)の2種類が各々の発達段階に応じた言語レベルで開発されているが、本研究ではMMQL-AFを用いる。

② Pediatric Quality of Life Inventory (PedsQL-J) 日本語版

MMQL日本語版の妥当性検討尺度として、本尺度の13歳~18歳用を用いる。

③自己肯定意識尺度

青年期特有の自尊感情がQOLに与える影響について発達心理学的視点より明らかにするために本尺度を用いる。

3) 記入の終了した質問紙は、返信用封筒を用いて郵送にて研究者宛に返送する。

4) 小児がん経験者群については、研究に必要な最小限の医学的情報を主治医より得る。

5) 調査データは多変量解析による分析を行う。

(倫理面への配慮)

適格条件を満たす本人および保護者に対して、研究の目的、方法、内容、本研究をいつでも拒否できること、またそのことにより治療上の不利益はいっさい受けないこと、プライバシーは厳重に保護されることについて文書にて説明を行う。回答は無記名であること、さらに郵送法であることから拒否権が十分に保証されており、調査への協力の任意性が担保されているため、返信をもって同意が得られたものとする。

### C. 研究結果

以下の各施設にて各々の倫理審査委員会の承認を得て調査を実施継続中である。

#### 1) 小児がん経験者群

- ①国立がんセンター小児科
- ②東京医科歯科大学医学部附属病院小児科
- ③聖路加国際病院小児科
- ④東北大学病院小児科
- ⑤神戸大学医学部附属病院小児科
- ⑥千葉県子ども病院

#### 2) 対照群

下記施設において、調査実施のための倫理審査申請中である。

目白研心中学校・高等学校

### D. 考察

小児がん経験者にとって、治療終了後の QOL の維持・向上は重要な課題である。開発される MMQL 日本語版を用いた小児がん経験者の QOL 調査から得られる結果（主に記述統計的なデータ）は、治療終了後の経時的な QOL の変化をとらえることができると同時に、QOL のよい場合、悪い場合の要因を分析することにより、小児がん経験者の QOL 改善のための臨床的示唆とすることができる。また、本研究結果と、これまでに発表されている MMQL 研究（海外の小児がん経験者あるいは健常児を対象としたもの）結果との比較所見は、今後、小児がん経験者の長期フォローアップシステムを構築する上で貴重な基礎資料となると考える。

### E. 結論

小児がん経験者の QOL 評価尺度として MMQL 日本語版の標準化のため、複数医療機関における小児がん経験者の調査および対照群として小児がん等慢性疾患を有しない対象の調査を実施継続中である。

### F. 健康危険情報

なし

### G. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

### 共同研究者

松島 英介：東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科

牧本 敦：国立がんセンター中央病院小児科

石田也寸志：聖路加国際病院小児科

水谷 修紀：東京医科歯科大学大学院発生発達病態学分野

力石 健：東北大学病院小児科

早川 晶：神戸大学医学部附属病院小児科

沖本 由理：千葉県子ども病院

平成21年度 分担研究報告書

分担課題名 QOLに基づくがん患者支援療法等の分類および効果評価に関する研究

研究分担者 大野ゆう子 施設名 大阪大学大学院医学系研究科 職名 教授

研究要旨

がん治療におけるQOLにおいて病棟における療養環境は重要である。本研究ではがん専門病院について他計式30時間連続タイムスタディを実施し、看護師の療養環境維持、患者安全、治療支援業務の実態を把握した。

A. 研究目的

「がん生存者 (Cancer survivor) のQOL向上に有効な医療資源の構築研究」において、治療環境である病院/病棟における看護提供は直接的に患者QOLと密接な関係を持つものである。本研究ではタイムスタディによりがん専門病院における看護提供実態の把握を行った。

B. 研究方法

A がん専門病院の3病棟において、平成21年12月から22年3月にかけて他計式タイムスタディを日勤開始時から翌朝の夜勤終了時まで実施した。全病棟とも2交代勤務であった。対象は日勤：病棟師長、リーダー、スタッフおよび看護助手の計4名、夜勤：看護師2名と看護助手、または看護師3名。日勤は全勤務者のほぼ半数、夜勤では全数を対象とした。

(倫理面への配慮)

看護部との共同研究として病院倫理審査にて承認を受け調査対象が医療スタッフであること、勤務査定には用いないことなどをスタッフや患者に説明、了解を得て行った。

C. 研究結果

対象病院は完全電子カルテ化されており、看護師/看護助手/クラーク、常勤/非常勤、早出/遅出などさまざまな職種や勤務体制を組合せて稼働していた。3病棟中2病棟は一般消化器外科系病棟(以下一般病棟)に類似した疾病構成であり患者受持ち看護制を採用していた。1

病棟は療養型病床の病棟(療養病棟)で機能別看護制であった。調査当日一般病棟の入院患者は当日の入退院も含め40名程度であり、療養型病棟は55名程度であった。

療養病棟ではリーダー業務も兼務しており、看護助手人数も多く、入浴介助など看護師と看護助手の連携業務が多かった。電子カルテからの情報収集/入力では職種に所要時間、検索過程はかなり異なっていた。一般病棟では看護師長以外は自分の受持ち患者ワークシートを出力して必要事項を書込むなど活用しており完全ペーパーレスとはなっていなかった。声かけは一般/療養病棟ともに患者の意識レベルに関わらず常時行われており、認知に問題のある患者の対応にも注意が払われていた。

D. 考察

師長は病棟特性により違いはあるがケア情報の伝達において中心的役割を果たしていた。非常勤職員は看護師、看護助手に関わらずどの病棟でも機能的業務を中心に携わっており、常勤/非常勤職員が混在することによるケアの混乱はみられなかったが、連携の空き時間が発生する場面がみられた。医師との連携はかなり円滑であったが、緩和ケアなど頻繁な処方依頼が必要な場合にはタイムラグが大きくなる可能性が見いだされた。なお、当該病院では、病棟設計により器材の収納箇所やディスプレイの格納箇所が随所にあるためケア効率が高くなっていることが観察された。

## E. 結論

がん専門病院においてタイムスタディを実施し、師長、リーダー、看護師、看護助手の業務実態を明らかにした。機能別看護採用により効率化を図る病棟と個別ケアに重点をおいた病棟があること等が明らかとなった。常勤/非常勤の連携が重要であり、病棟施設設計もケア効率に影響することが見いだされた。

平成 21 年度 分担研究報告書

分担課題名 がん患者のセルフコントロール確立を目的とした専門ケアの提供に関する研究

研究分担者 青木 和恵 静岡県立静岡がんセンター看護部長

研究要旨

がん患者が、がんと共生における長い過程を意志的に、かつ QOL を維持して過ごすための支援システムを構築することを目的に、通院治療センターのがん看護専門看護師の支援に関する実態調査を行った。その結果、今年度上半期の支援件数は約 250 件で、その内訳は精神的ケアが 38%、症状マネジメントが 33%、意思決定に関する支援が 17%、家族ケアが 12% だった。精神的ケアでは、治療中の副作用や病状に対する不安と治療後の社会生活への不安、緩和医療移行に関するものが多かった。うつ症状や希死念慮、自殺企図に関するものや、担当医との関係で悩み相談するケースなどもみられた。症状マネジメントでは、血管炎や悪心・嘔吐のアセスメントやケアに関するものが多かった。意思決定に関する支援では、65% が治療継続に関するもので、家族ケアでは、治療中の治療や副作用、病状に関する不安や混乱が主だった。またこれらの他に、患者と医師間、患者と家族間の意思のずれなどに関する倫理調整が 24 件あった。今後はこれらの多様なニーズに対応するために、「よろず相談」などの相談機能と、専門・認定看護師の機能とを用いて、がん化学療法を受ける通院患者に専門の高いケアを提供するシステムを造っていく必要がある。

A. 研究目的

がん患者が、がんと共生における長い過程を意志的に、かつ QOL を維持して過ごすための支援システムを構築することを目的として、通院化学療法患者にがん看護専門看護師が行っている支援の実態を把握し、患者の具体的なニーズの状況や動向を掴む。

B. 研究方法

2009 年 4 月 1 日から 2009 年 9 月 30 日までの期間において、通院治療センターに所属するがん看護専門看護師が行った通院化学療法患者への支援に関する数とその内容をプロスペクティブに調査した。

C. 研究結果

支援件数は延べ 239 件であった。その内容は、精神的ケアが 38%、症状マネジメントが 33%、意思決定に関する支援が 17%、家族ケアが 12% であった。対象者は、看護師 81%、患者・家族が 10%、MSW が 4% であり、その他 5% は医師、心理療法士、CNS だった。

精神的ケアの内容は、治療中の副作用や病状に対する不安が多く、治療後の社会生活を送るうえでの不安や緩和医療移行後のケアに関する相談もみられた。その他はうつ症状や希死念慮、自殺企図に関するものや、担当医との関係問題であった。症状マネジメントでは、血管炎や悪

心・嘔吐のアセスメントやケアに関するものが多かったが、アレルギーや皮膚障害、疲労などもあった。意思決定に関するものでは、65% が治療継続に関するもので、その他は治療選択や緩和医療への移行に関するものだった。家族ケアでは、治療中の治療や副作用、病状に関する不安や混乱などに関するものが多かった。

倫理調整に関する実施件数は延べ 24 件であった。内容として多かったものは、治療継続に関する問題の 46% であり、患者と家族、医療者間で意思のずれに関するものであった。その他は、治療の実施について看護師が疑問を持つものや、治療選択に関する意思のずれ、患者が母親である場合の子どもへの告知に関する患者と看護師の意思のずれなどに関するものであった。相談者が倫理的ジレンマを感じて相談してくる場合と、相談者が倫理的問題に気がついていない場合があったが、どちらも相談者とともに問題の分析を行ったり、関連する人との面談を行ったりしながら調整を図っていた。外来治療から入院治療への移行後に相談がある場合もあり、病棟師長や病棟担当の CNS と連携をとり調整することもあった。

D. 考察

支援の対象は看護師が多かったが、その中にはケアを実施した後にアセスメントやケアが間違っていなかったか確認したいとい

うことなども多く含まれていた。全体的に、専門看護師を活用しようとする看護師あるいは医療スタッフのケアの実践レベルが向上していることが評価できた。支援内容では、前年度と同様に精神的ケアが一番多く、治療中に関するものが多くみられた。今年度は、うつ症状や希死念慮のアセスメントやケアについての支援が増加していた。症状マネジメントでは、血管炎が再び増加傾向にあった。家族ケアでは、治療中に関するものが多かったが、家族が直接相談してくることも多くみられた。

倫理調整では、相談者が倫理的ジレンマを感じている場合には、相談者の主観が強かったり、自分の判断基準の枠に患者の状況を当てはめて考えていたりすることがあったため、相談者が客観的に自分の考え方や患者や家族の状況、患者や家族の思い、他の医療者の考え方などを理解できるように調整していた。子どもへの告知に関しては、早期からCLSなどの支援が受けられることを紹介している。

これらのことから外来で治療を受ける患者と家族が多く支援を必要としていること、また患者をケアしている看護師など医療者にも支援が必要であることが明確となったので、今後はこれらの支援をシステム化することの検討を行う必要がある。

## E. 結論

通院化学療法患者にがん看護専門看護師が行った支援件数は半年間で239件で、その内訳は精神的ケアが38%、症状マネジメントが33%、意思決定に関する支援が17%、家族ケアが12%であった。支援に関する相談者は、看護師81%、患者・家族が10%、MSWが4%であり、その他5%は医師、心理療法士、CNSだった。倫理調整件数は、24件で、内容は治療継続に関する問題、患者と家族、医療者間で意思のずれに関するものなどであった。これらの状況から、外来で治療を受ける患者と家族が多く支援を必要としていること、また患者をケアしている医療者にも支援が必要であることが明確となった。今後はこれらの支援をシステム化していくことが必要である。

## G. 研究発表

### 1. 論文発表

書籍（日本語）

- ① 青木和恵、緩和ケアとしての褥瘡ケア：がんのリハビリテーション、辻 哲也（編）メジカルフレンド社、東京、2007
- ② 青木和恵、全身状態と褥瘡 がん終末期：最新褥瘡看護技術、真田弘美、須釜淳子（編）照林社、東京、2007
- ③ 青木和恵、全身状態と褥瘡 がん終末期：改訂版 実践に基づく最新褥瘡看護技術、真田弘美、須釜淳子（編）照林社、東京、2009

雑誌（日本語）

- ① 青木和恵、平井孝：担癌患者のストーマ排泄管理，日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌 Vol. 24 No. 3, 2008, p. 125-126.
- ② 青木和恵：がん終末期褥瘡ケア・アセスメントツール，緩和ケア Vol. 18 No. 10, 青海社, 2008, p. 171-174.
- ③ 青木和恵：膀胱がん～最新の治療と看護～膀胱がん患者の看護～長い過程を意志的に歩んでいくための支援～，がん看護 Vol. 13 No. 5, 南江堂, 2008, p. 502-503.
- ④ 青木和恵：終末期がん患者の褥瘡に向き合う，看護技術 Vol. 52 No. 10, メジカルフレンド社, 2006, p. 11-13.
- ⑤ 青木和恵：疼痛、呼吸困難、倦怠感のあるがん患者の褥瘡ケア，看護技術 Vol. 52 No. 10, メジカルフレンド社, 2006, p. 25-27.
- ⑥ 青木和恵：なぜ今、専門外来が必要とされているのか—ストーマ外来からみたその効果と課題—，インターナショナルナーシングレビュー Vol. 28 No. 1, 日本看護協会出版会 2005, p. 50-54.
- ⑦ 青木和恵：ストーマ管理，治療 Vol. 28 No. 4, 南江堂 2005, p. 1587-1591.

### 2. 学会発表

- ① 青木和恵：がん医療の中の褥瘡，第3回日本褥瘡学会中部地方会，2006
- ② 青木和恵：がん専門病院における褥瘡対策チームの実践と課題，第11回日本褥瘡学会学術集会，2009

分担課題名 がん患者のQOL向上のための栄養・食事相談のあり方に関する研究

研究分担者 稲野利美 施設名 静岡県立静岡がんセンター 職名 管理栄養士

#### 研究要旨

在宅、通院にて治療を続けるケースが増える現在、患者や家族は自宅で食欲不振などの副作用や後遺症に悩んでいる事は他の研究で明らかになっている。しかし相談窓口を設けても実際相談されるケースは少なく、書籍などの参考資料を求めるケースが多い。このような現状を踏まえ、どのような食事相談、情報の提供をどのような形で行なえば有効的かつQOL向上に貢献できるか検討を行う必要がある。今回一方法として「WEB版がんよろず相談」における食事情報提供について、有用性や問題点などを検討する。更に他の方法の可能性、必要性についてもあわせて検討していく。

#### A. 研究目的

どのような栄養・食事相談、情報の提供をどのような形で行なえば有効か、またQOL向上に貢献できるか検討を行う。今回ひとつの形として「WEB版がんよろず相談」における食事情報提供について、有用性や問題点などを検討する。

また、他の方法の有効性、必要性についても検討する。

が多くなっている。Web版の利点生かし、利用者の感想・評価より、情報の精度をより高めていきたいところだが、当システムは、利用者の症状等とクロスさせた分析がしにくい現状がある。患者・家族では前年同様「わかりやすい」「レシピが豊富」「簡単に作れる料理」という点への評価が高くなっている。また医療関係者では、「アドバイスのヒントにしやすい」「わかりやすい」「ネットで公開」「レシピが豊富」という点を評価している。

#### B. 研究方法

日常の相談や指導や、集団での患者勉強会、地域内他施設との調理実習・試食交流会試行を通じ、患者家族のニーズと、現状の問題点を探ると共に、WEB版に掲載中の情報について活用状況や意見を分析し、栄養・食事指導や相談の有効的な方法、必要とされている情報とその提供のあり方・方法について検討する。

#### (倫理面への配慮)

個人を特定する情報などはあらかじめ除かれた状態で検討を行っている。

#### C. 研究結果

WEB版利用者の属性を見ると、医療関係者と患者家族がほぼ同率で各4割程度。また、情報の種類から調理を担う女性家族の利用率

#### D. 考察

近年の治療において、患者や家族の治療への参加は効果的な治療を行う上で、欠かせない。また、地域の医療関係者への情報提供も地域連携、治療の均等化に重要な役割を果たすと考える。WEBという形では高齢者の参照が難しい。情報提供が積極的に行われるようになり、様々な情報が発信されるが、個人としては時期や症状、治療方法などで必要となる情報が異なる。

今後は、溢れる情報から個人に必要な不可欠な情報をどのように抽出し、提供するかを検討すべきではないかと考える。また実際には医療関係者の活用が多く、現場でもアドバイス方法に苦慮している現状がうかがえる。医療者を介して患者、家族への説明に活用されるというパターンは情報の安全性を高める意味でも有効といえる。効果的な治療を行うために、患者や家



族に是非実践してほしい具体的な実生活で即活用できる情報を各個人用に処方し提供していかなくてはならない。また、栄養・食事相談、指導において、一人の患者が様々な施設や環境に移動する現状を考えると、地域での連携方法も検討が必要である。その意味で今回試行した他施設との調理実習などは、今後検討すべき方法と考える。

#### E. 結論

WEB版における食事に関する情報提供は、広く周知可能な点、支援施設への情報提供、情報の更新という意味で有効と思われる。ただし、画一的な情報提供では、情報収集能力や理解にむらがある。効果的な治療に患者家族の参加が不可欠な昨今、各個人の合わせた情報の処方的な考えで地域でシステム化していくことも一案と考える。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

雑誌(日本語)

- ① 稲野利美、静岡県立静岡がんセンターにおける取組み 自己管理力向上をめざして：栄養士の立場から、医学のあゆみ、医歯薬出版、Vol. 231 1203-1209, 2009
- ② 症状で選ぶ！がん患者さんと家族のための抗がん剤・放射線治療と食事のくふう、女子栄養大出版部、2009.9 初版第6刷

##### 2. 学会発表

なし

平成 21 年度 分担研究報告書

分担課題名 がん患者・家族の QOL 向上を目的とした総合相談や情報提供のあり方に関する研究

研究分担者 高田 由香 施設名 静岡県立静岡がんセンター 職名 よろず相談 主幹技師

研究要旨

患者・家族は様々な手段やメディアにより自ら必要とする情報を入手することができるようになったが、多くの情報量の中から適切な情報にたどり着くには困難性が高い患者層もいる。利用者が相談支援センターに求める情報とは何かを分析し、収集・蓄積した情報ツールをうまく活用することで総合相談の質が向上するものとする。

A. 研究目的

静岡がんセンターでは開院より 8 年目を迎え、毎年あらたにがんを診断され治療を開始したばかりの新患者、長期間にわたって治療や経過観察を続けているサバイバー、再発・転移の経過の中で積極的な治療が難しくなった患者など異なる患者層が混在する様相を呈している。当然その病期によって生活上の問題や不安を感じる事柄も異なるものを抱えている。それらの生活課題や問題を克服するためにこころや身体のバランスをいかに保ち、自分でコントロールしていくかというセルフケアが重要になってくると考える。利用者の QOL 向上を目的とした情報提供や総合相談のあり方と、これまで継続してきた学習会形式の情報提供の内容について、再評価・検討を行うことを目的とする。

B. 研究方法

学習会は平成 16 年 11 月より実施し、平成 21 年度も月 2 回（同一内容）計 23 回開催し、参加者アンケートを実施した。また前年度に参加者の関心の高かった講義内容を一部継続し、今年度は「こころとからだのセルフケア」というシリーズをあらたに加え、参加者のニーズに即したより専門的な情報提供を心がけた。

（倫理面への配慮）

アンケートは、集計内容の比較を可能にするため昨年と同形式を使用。参加者の匿名性を重視した上で、属性や感想、現在の悩みなどを聴取する質問項目とした。

C. 研究結果

平成 21 年 4 月から平成 22 年 3 月まで、計 23 回の学習会を企画・運営した。参加者は延べ 470 名。テーマごとの参加状況をみると「がんの体験をわかちあう場への要望（意見交換会）」計 3 名（1 回開催）、「つながる緩和ケア」計 16 名、「がんの痛みは我慢しない」計 22 名、「不安やストレスの解消方法」計 69 名、「漢方薬の活用法」計 58 名、「がんとう食事」計 84 名、「画像診断機器と検査の特徴」計 25 名、「放射線治療の今」計 58 名、「セルフマッサージの仕方」計 63 名、「日常生活のすごし方」計 36 名、「患者と医療者のコミュニケーション」計 25 名、「大切な人が病気になったとき」計 11 名という結果であり、1 回あたりの参加人数 20 名と昨年度（H20 年度：21 名）より若干減少している事がわかった。

D. 考察

参加者の傾向は計 470 名中、男性が 30%、女性が 70%と、女性の方が 2 倍以上と参加が多かった。実施したアンケートの回収率は 68%、アンケート回答者の男女比では男性 33%、女性 63%であった。回答者の年齢は「60～70 歳代」51%、次いで「40～50 歳代」32%であった。昨年に比べると参加者の高齢化がみられた。また「本人」47%、「配偶者」22%、「子供」9%の順であり、患者本人が主体性を持って参加している状況が、昨年同様に確認された。学習会内容の理解度についての質問では「理解できた」「少し理解できた」と解答した人は回答者

の96%にのぼった。また悩みや関心についての質問(複数回答)では「症状・副作用」が88名と最も多く、次いで「精神的な悩みやこころの問題」69名、「食事」62名、「緩和ケア」57名、「新しい治療や代替医療」55名となっている。静岡がんセンターが開院して7~8年目を迎える年度であり、新患よりも再発・転移あるいは終末期を迎えた時期の患者層が多くなっていることから、興味関心も「生活維持に関すること」「治療による影響」「精神面やこころの問題」に加え、「新しい治療や代替医療」への関心へも高まっている状況が伺えた。

#### E. 結論

学習会の参加者は、主体的・意欲的な学習態度が伺える。しかしその一方で、治療や病状は安定していたとしても、精神面では不安定な要素を抱えており、動きを伴うような講義内容であった場合に参加を拒むような方もみうけられた。また個別的な問題を相談したい意向を持っている方も多く、講義終了後講師に個別に話しかけたり、よろず相談を利用されたりするケースが見受けられた。また講義内容により参加者同士の意見交換が行われ、よいアドバイスが得られたり参加者同士のコミュニケーションが生まれたりする中で、双方により気づきやサポートが得られた様である。

今後は講義形式にとらわれず参加型の学習会へ発展させていくことが課題である。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

- ・医療ソーシャルワーカーの役割：がん化学療法、日本看護協会出版会、東京、84-88, 2008. 10. 1
- ・セカンドオピニオン：がん看護研修マニュアル、南江堂、東京、29-30, 2010, 2, 25

##### 2. 学会発表

なし

#### 研究要旨

治療が第一命題である入院環境において、小児がんで入院している子どもの不安やストレスを軽減し、その子なりの認知的・情緒的・社会的発達に滞らないように、遊びを通じて支援を行う。

また、小児がんの子どもを持つ家族（兄弟姉妹含む）が安心してケアに参加できるよう、多職種医療チームの一員として家族中心ケアを提供する。

さらに、がんに関わった成人患者への相談支援、その子どもへの遊びを介したサポートを提供することで、患者家族中心ケアに貢献する方法を探索する。

#### A. 研究目的

小児がん患者・家族の心の安定をはかるため、また、家族をがんで亡くす子どもへの支援環境を整えるために、チャイルド・ライフ・スペシャリストの専門性（遊びをベースにした介入法）を通じ、心理社会的サポートを中心とした介入を行い、事態を把握し、ニーズを分析しながら、多職種チームと協同し、サポート体制を構築する。

また、がんを患う成人患者、その子ども、そしてがんで親を亡くした子どもを対象としたグリーフ・サポートについても、チャイルド・ライフの理論に基づき実践していく。さらに、長期的な課題として、これらのサポート体制の構築方法・実践・評価についても検討していきたい。

#### B. 研究方法

多職種チームと連携し、本研究の研究費から購入したおもちゃや手工芸材料などを用い、子どもや家族と信頼関係を築くとともに、それぞれの子どもの認知的・情緒的・心理社会的発達のアセスメントを行った。それによって得られた情報（子どもとその家族のニーズやそれぞれの子どもの適したアプローチ法など）を多職種チーム内でカンファレンス等を通じて共有し、有益なリソースとして活用した。

#### (倫理面への配慮)

個人情報取り扱いに関しては、本研究では介入は日常診療に基づいており、よって個人情報の取り扱いについても通常診療の範囲内で十分な倫理的配慮がされていることが前提にある。なお、本研究に当たっては厚生労働省の臨床研究に関する倫理指針を遵守し、介入に当たっては対象者（未成年者の場合は親権者）の同意を充分確認するものであり、データ整理時には個人情報を匿名化するものである。

#### C. 研究結果

病院環境の中においてもおもちゃや遊びの場など安心できる時間・空間を提供すること、多職種による心理社会的サポートを提供することで、入院中の子どもやがんを患う親に付き添う子どものノーマライゼーションがはかられ、同時に医療スタッフや子どもの家族等からもチャイルド・ライフ・スペシャリストのアプローチに対して肯定的な評価を得られている。また、このような関わりを多職種と連携しながら、学会等で積極的に発表している。

親を亡くした子どものための遺族会に関しては、試みを始めてから5年が過ぎ、毎年参加人数はそれほど多くはないものの、親を亡くすという大きなライフイベントを体験した子どもたちが、親が亡くなった病院に来て、同じ経験をした子どもとともに、遊びという、より

自然な形を通して、このライフイベントを消化していく貴重な場になっていると、各職種からのフィードバックを受けている。

#### D. 考察

従来の日本の病院システムには存在しなかったチャイルド・ライフ・スペシャリストの介入に関する本研究は、入院中の子どもとその家族の心理社会的なニーズや、親を亡くす子どもを対象としたグリーフ・ケアへのニーズを浮き彫りにした。治療を行う上でのケアの輪の中に、患者本人である子どもを入れること、同様に、成人患者の子どもも蚊帳の外に置くのではなく親である患者のケアの輪に入れることにより、子どもがより主体性をもって治療に向き合い、あるいは親を亡くす、亡くしていく事実に関心を持って臨むことができる一助になると考えられる。

#### E. 結論

当院ではチャイルド・ライフ・スペシャリストの介入の必要性を理解する多職種医療チームが円滑な連携を展開しつつある。これを継続し、子どもとその家族中心の質の高い医療を提供していくことで、患者家族中心ケアを更に高い次元へと発展させ、更には院外にも当院で発展してきた患者家族中心医療の理念を広めていくことが今後の重要な課題である。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

平成 21 年 6 月 19 日

第 14 回日本緩和医療学会学術集会

口演：親を亡くす子ども達への支援

—子どもたちの思いを聴くことから—

成果の刊行に関する一覧表【平成 21 年度】

雑誌：外国語

| 発表者氏名                            | 論文タイトル名   | 発表誌名                     | 巻 号 | ページ       | 出版年  |
|----------------------------------|---|--------------------------|-----|-----------|------|
| Hyodo I,<br>Adachi I, et al.     | Development of a predicting tool for survival of terminally ill cancer patients   | Jpa J Clin Oncol         | 1   | 2-7       | 2010 |
| Nagai Y, et al.                  | The Influence of informing patients about cancer on their quality of life in gastric, lung, and colorectal cancer patients in japan | Quality of Life Research |     | A-96      | 2009 |
| Morita T,<br>Suga A, et al.      | Meaninglessness in terminally ill cancer patients: a randomized controlled study.   | J Pain Symptom Manage.   | 37  | 649-58    | 2009 |
| Takeuchi H,<br>Tashiro H, et al. | Clinicopathological characteristics of recurrence more than 10 years after surgery in patients with breast carcinoma                | Anticancer Res           | 29  | 3445-3448 | 2009 |

雑誌：日本語

| 発表者氏名                    | 論文タイトル名  | 発表誌名     | 巻 号 | ページ     | 出版年  |
|--------------------------|--|----------|-----|---------|------|
| 山口建                      | 高度先進医療・患者視点の重視を両話に「地域に根差した病院」を実現                                   | がん治療最前線  | 67  | 3-7     | 2010 |
| 永井宏和                     | 難治性悪性リンパ腫の治療戦略—再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫                                     | 血液フロンティア | 20  | 21-28   | 2010 |
| 永井宏和                     | リツキシマブ導入後の B 細胞性腫瘍治療—未治療 B 細胞性リンパ腫治療におけるリツキシマブの有用性：国内一般診療データに基づく検討 | 血液・腫瘍科   | 60  | 6-10    | 2010 |
| 東さやか、<br>森本茂文、<br>田伏克惇、他 | TS-1 適正使用確認システムの構築とその応用  | 癌と化学療法   | 37  | 469-472 | 2010 |

成果の刊行に関する一覧表【平成 21 年度】

| 発表者氏名                   | 論文タイトル名   | 発表誌名                     | 巻 号 | ページ       | 出版年  |
|-------------------------|---|--------------------------|-----|-----------|------|
| 安達勇、他                   | 末期がんだけではない<br>「緩和ケア」は、ここまで<br>進化した                                    | ナーシング・<br>カレッジ           | 2   | 44-50     | 2010 |
| 安達勇、<br>本山清美            | 外来がん化学療法患者に対<br>する緩和ケア  | がん患者と対症<br>療法            | 2   | 33-39     | 2010 |
| 山口建                     | 多職種チームの医療の実践  | Oncology Network         | 2   | 3         | 2009 |
| 山口建                     | がん医療現場での Quality<br>improvement を考える<br>-患者参加型医療への対応-                 | 安全医学                     | 5   | 5-11      | 2009 |
| 濃沼信夫                    | 介護予防の評価、<br>医療経済学・政策学の視点<br>から  | 公衆衛生                     | 73  | 286-289   | 2009 |
| 濃沼信夫                    | がん検診の現状と問題点   | 日本医師会雑誌                  | 138 | 43-46     | 2009 |
| 濃沼信夫                    | 胃癌撲滅戦略による経済効果   | Helicobacter<br>Research | 13  | 380-384   | 2009 |
| 濃沼信夫                    | 分子標的薬の医療経済  | 日癌治                      | 44  | 232       | 2009 |
| 濃沼信夫                    | 胃癌の医療経済   | The Forefront            | 5   | 33-36     | 2009 |
| 濃沼信夫                    | がん診療の医療経済学、<br>がん薬物療法学<br>基礎臨床研究のアップデート                               | 日本臨床                     | 67  | 17-24     | 2009 |
| 大友理恵子、<br>柴光年、他         | 化学療法中の食欲不振患者<br>への食事援助<br>-化学療法食を考案して-                                | 全自病協雑誌                   | 48  | 116-119   | 2009 |
| 望月泉                     | がんの病診連携   | 治療                       | 91  | 2382-2388 | 2009 |
| 松山円、<br>石田裕二、<br>大曲睦恵、他 | 【病児のきょうだい支援】<br>看護支援の実際<br>自宅から離れた場所で治療<br>を受ける患児のきょうだい<br>への説明       | 小児看護                     | 32  | 1316-1322 | 2009 |
| 石田裕二、<br>大曲睦恵、他         | family-centered-care を目<br>指してのチーム医療：<br>チャイルドライフスペシャ<br>リストと小児科医の連携』 | 日本小児科学会誌                 | 110 | 134       | 2009 |
| 佐々木常雄                   | 生と死を見つめて  | Modern Physician         | 29  | 1501-1504 | 2009 |

成果の刊行に関する一覧表【平成 21 年度】

| 発表者氏名            | 論文タイトル名   | 発表誌名             | 巻 号 | ページ       | 出版年  |
|------------------|---|------------------|-----|-----------|------|
| 佐々木常雄            | 終末期における心のバトン  | 訪問看護と介護          | 4   | 366-371   | 2009 |
| 佐々木常雄            | 医療のピットフォール<br>がん緩和医療での告知とイン<br>フォームドコンセント<br>(解説)         | 治療学              | 43  | 441-443   | 2009 |
| 小西敏郎、<br>佐々木常雄   | アンケート調査からみた再<br>発・進行がん患者の疼痛管<br>理における主治医の役割の<br>重要性       | 癌と化学療法           | 36  | 453-460   | 2009 |
| 佐々木常雄            | 都道府県がん・地域がん診<br>療連携拠点病院                                   | 日本臨床             | 67  | 544-549   | 2009 |
| 永井宏和             | リンパ系腫瘍<br>-新 WHO 分類 (第 4 版) は<br>どのように変わったか-<br>成熟 B 細胞腫瘍 | 臨床血液             | 50  | 244-252   | 2009 |
| 味澤篤、<br>永井宏和、他   | エイズ関連非ホジキンリン<br>パ腫 (ARNHL) 治療の手引き<br>Ver 1.0              | 日本エイズ学会誌         | 11  | 108-120   | 2009 |
| 永井宏和             | 悪性リンパ腫治療の進歩<br>-限局期症例は治癒可能か                               | Current Therapy  | 27  | 23-26     | 2009 |
| 片岡明美、<br>大野真司    | 30 歳以下の若年性乳癌の<br>臨床病理学的解析と結婚・<br>出産に関する検討                 | 乳癌の臨床            | 24  | 39-42     | 2009 |
| 中村吉昭、<br>大野真司、他  | 外来がん化学療法における<br>チーム医療と外科                                  | 臨床外科             | 64  | 1225-1233 | 2009 |
| 長井吉清、他           | 病名告知のクオリティオブ<br>ライフへの影響                                   | 癌の臨床             | 55  | 389-393   | 2009 |
| 上田由喜子、<br>長井吉清、他 | がん患者の希望に関する<br>意識構造                                       | Health Sciences  | 25  | 212       | 2009 |
| 細川治、<br>宮永太門、他   | 早期胃癌診断の現状   | 胃と腸              | 44  | 455-464   | 2009 |
| 大田洋二郎            | がん患者を支える口腔ケア<br>と歯科治療                                     | The Quintessence | 28  | 146-157   | 2009 |
| 大田洋二郎、<br>上野尚雄   | 外来治療を受ける患者への<br>口腔ケアの重要性                                  | 外来看護最前線          | 14  | 66-76     | 2009 |
| 大田洋二郎            | がん患者さんも安心して<br>使える口腔ケア商品                                  | 消化器外科<br>NURSING | 14  | 4-7       | 2009 |



成果の刊行に関する一覧表【平成21年度】

| 発表者氏名 | 論文タイトル名   | 発表誌名         | 巻号  | ページ       | 出版年  |
|-------|---|--------------|-----|-----------|------|
| 大田洋二郎 | がん患者への口腔ケアの<br>実践                                     | 訪問看護と介護      | 14  | 912-916   | 2009 |
| 大田洋二郎 | がん患者を地域で支える医<br>科・歯科連携の実際                             | 地域連携 network | 2   | 112-118   | 2009 |
| 小池眞規子 | 病む子どもの傍らで   | 臨床心理学        | 9   | 341-345   | 2009 |
| 稲野利美  | 静岡県立静岡がんセンター<br>における取組み<br>自己管理能力向上をめざし<br>て：栄養士の立場から | 医学のあゆみ       | 231 | 1203-1209 | 2009 |

書籍：日本語

| 著者氏名                                 | 論文タイトル名                         | 書籍全体の<br>編集者名 | 書籍名                             | 出版社名 | 出版地 | 出版年  | ページ     |
|--------------------------------------|---------------------------------|---------------|---------------------------------|------|-----|------|---------|
| 山口建、他<br>(「がんの社会<br>学」に関する<br>合同研究班) |                                 |               | がんよろず<br>相談 Q&A<br>第6集<br>乳がん編③ |      | 静岡県 | 2010 |         |
| 山口建                                  | がんの社会学と<br>患者支援                 | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 12-18   |
| 山口建                                  | がん対策の総合<br>的戦略—予防・検<br>診・受診・情報— | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 41-48   |
| 石川睦弓、<br>北村有子                        | 患者・家族支援                         | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 19-22   |
| 高田由香                                 | セカンドオピニ<br>オン                   | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 29-30   |
| 青木和恵                                 | 褥瘡ケア                            | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 255-259 |
| 稲野利美                                 | 栄養管理                            | 静岡がん<br>センター  | がん看護 BOOKS<br>がん看護研修<br>マニュアル   | 南江堂  | 東京都 | 2010 | 204-213 |

成果の刊行に関する一覧表【平成21年度】

| 著者氏名         | 論文タイトル名                                | 書籍全体の<br>編集者名    | 書 籍 名  | 出版社名                | 出版地 | 出版年  | ページ     |
|--------------|--|------------------|--|---------------------|-----|------|---------|
| 山口建          | 急増する患者。<br>がんの2015年<br>問題にどう立ち<br>向かうか |                  | がんを生き抜<br>くための指南<br>書                                |                     | 東京都 | 2010 | 73-86   |
| 濃沼信夫         | 大腸癌治療の費<br>用効果                         | 武藤徹一郎<br>(監)     | 大腸癌診療で<br>知っておきた<br>い医療経済<br>大腸疾患<br>NOW2010         | 日本<br>メディカル<br>センター | 東京都 | 2010 | 81-87   |
| 濃沼信夫         | がんの医療経済                                |                  | 新しい診断と<br>治療のABC<br>「胃癌」                             | 最新医学社               | 大阪府 | 2010 | 236-244 |
| 永井宏和         | 骨髄腫 annual<br>report 2009              | 日本<br>骨髄腫<br>研究会 | 日本人再発<br>難治多発性<br>骨髄腫におけ<br>るレナリミド<br>国内臨床試験<br>について | 日本<br>骨髄腫<br>研究会    | 愛知県 | 2010 | 14-19   |
| 坂下義彦、<br>渡辺敏 | がん診療連携拠<br>点病院としての<br>活動<br>緩和医療センター   | 木村秀樹             | がん診療ハン<br>ドブック                                       | 永井書店                | 大阪府 | 2010 |         |
| 小池真規子        | 人生半ばで<br>大病に罹ること                       | 岡本祐子             | 成人発達<br>臨床心理学  | ナカニシヤ<br>出版         | 京都府 | 2010 | 298-305 |
| 山口建          | がんよろず相談<br>(相談支援センター<br>の取り組みと役割       |                  | がん医療入門   | 朝倉書店                | 東京都 | 2009 | 218-225 |
| 山口建          | 「がんの社会学」<br>を目指して                      |                  | 医の倫理・<br>シリーズ講演会<br>よい医師にな<br>る                      | 日本医学<br>出版          | 東京都 | 2009 | 93-111  |
| 佐々木常雄        |  |                  | がんを生きる<br>主治医から<br>余命を告げら<br>れたらどうす<br>ればいいのか        | 講談社                 | 東京都 | 2009 |         |

成果の刊行に関する一覧表【平成 21 年度】

| 著者氏名                   | 論文タイトル名   | 書籍全体の編集者名              | 書籍名  | 出版社名             | 出版地 | 出版年  | ページ     |
|------------------------|---|------------------------|--|------------------|-----|------|---------|
| 永井宏和                   | 低悪性度<br>非ホジキンリン<br>パ腫   | 直江知樹                   | 現場で役立つ<br>血液腫瘍治療<br>プロトコール<br>集                    | 医薬<br>ジャーナ<br>ル社 | 大阪府 | 2009 | 98-113  |
| 永井宏和                   | びまん性大細胞<br>型 B 細胞リンパ<br>腫は、胚中心 B 細<br>胞(GCB)と活性型<br>B 細胞(ABC)型で<br>治療方針をかえ<br>るべきか? | 金倉譲、<br>木崎昌弘、<br>他     | 2010-2011 EBM<br>血液疾患の治<br>療                       | 中外医学社            | 東京都 | 2009 | 301-306 |
| 永井宏和                   | ホジキンリンパ<br>腫一局限期ホジ<br>キンリンパ腫  | 飛内賢正、<br>堀田知光、<br>木下朝博 | 悪性リンパ腫<br>治療マニユア<br>ル                              | 南江堂              | 東京都 | 2009 | 177-181 |
| 永井宏和                   | 病気のひろがり<br>(臨床病期)   | 堀田知光                   | インフォーム<br>ドコンセント<br>のための図説<br>シリーズ<br>「悪性リンパ<br>腫」 | 医薬ジャ<br>ーナル      | 大阪府 | 2009 | 20-23   |
| 重松英朗、<br>中村吉昭、<br>大野真司 | ホルモン感受性<br>乳癌に対する治<br>療   | 稲治英生                   | 乳癌テーラー<br>メイド治療の<br>理論と実践                          | 金原出版             | 東京都 | 2009 |         |
| 森恵美子、<br>重松英朗、<br>大野真司 | 術前後化学療法<br>の考え方   | 戸井雅和                   | みんなに役立つ<br>乳癌の基礎<br>と臨床                            | 医薬ジャ<br>ーナル      | 大阪府 | 2009 |         |
| 山下浩介                   |   |                        | がん患者・家族<br>のサポート                                   |                  | 北海道 | 2009 |         |
| 須賀昭彦                   | 厄介な痛み<br>(その1)<br>神経障害性疼痛   | 平原佐斗司、<br>茅根義和         | チャレンジ!<br>在宅がん緩和<br>ケア                             | 南山堂              | 東京都 | 2009 |         |
| 柏木雄次郎                  | がんの痛みを和<br>らげる<br>(疼痛緩和)  | 大阪府立<br>成人病<br>センター    | がんを治す<br>チカラ                                       | 毎日新聞             | 東京都 | 2009 | 176-177 |
| 柏木雄次郎                  | がんの初期から<br>始まる緩和ケア  | 大阪府立<br>成人病<br>センター    | がんを治す<br>チカラ                                       | 毎日新聞             | 東京都 | 2009 | 180-181 |

成果の刊行に関する一覧表【平成21年度】

| 著者氏名                   | 論文タイトル名                                      | 書籍全体の<br>編集者名 | 書 籍 名  | 出版社名         | 出版地 | 出版年  | ページ     |
|------------------------|--|---------------|--|--------------|-----|------|---------|
| 柏木雄次郎                  | がん患者さんのメンタルケア                                | 大阪府立成人病センター   | がんを治すチカラ   | 毎日新聞         | 東京都 | 2009 | 182-183 |
| 柏木雄次郎                  | 緩和・精神ケアとがん看護                                 | 大阪府立成人病センター   | ここが知りたい<br>-がん診療 Q&A                                     | 永井書店         | 大阪府 | 2009 | 152-158 |
| 井上賢一                   | 非浸潤性乳癌に対する薬物療法                               | 戸井雅和          | 乳癌の基礎と臨床   | 医薬ジャーナル      | 大阪府 | 2009 | 490-496 |
| 井上賢一                   | タキサンとの役割                                     | 佐伯俊昭          | 乳がんの標準化学療法の実   | 金原出版         | 東京都 | 2009 | 11-14   |
| 奥原秀盛                   | 死の受容過程理論                                     | 黒田裕子          | 看護診断のためのよくわかる中範囲理論                                       | 学習研究         | 東京都 | 2009 | 205-212 |
| 吉田隆子                   | 子どもたちに生きる力を<br>-食育からのインプリンティティ<br>ングが健康への投資- | 日本生理人類学会      | カラダの百科事典   | 丸善           | 東京都 | 2009 | 116-120 |
| 吉田隆子、<br>せべまさゆき<br>(絵) | 「やさいだいす<br>きひみつのごはん」                         |               | はじめての<br>食育クッキング<br>えほん                                  | 金の星社         | 東京都 | 2009 |         |
| 吉田隆子、<br>せべまさゆき<br>(絵) | 「うどんはどこ<br>からきたの」                            |               | はじめての<br>食育クッキング<br>えほん                                  | 金の星社         | 東京都 | 2009 |         |
| 吉田隆子、<br>せべまさゆき<br>(絵) | 「4つのおさら<br>でげんきになあれ」                         |               | はじめての<br>食育クッキング<br>えほん                                  | 金の星社         | 東京都 | 2009 |         |
| 青木和恵                   | 全身状態と褥瘡<br>がん終末期                             | 真田弘美、<br>須釜淳子 | 実践に基づく<br>最新褥瘡看護<br>技術                                   | 照林社          | 東京都 | 2009 |         |
| 稲野利美                   |  |               | 症状で選ぶ！<br>がん患者さんと<br>家族のための<br>抗がん剤・放射<br>線治療と食事<br>のくふう | 女子栄養<br>大出版部 | 東京都 | 2009 |         |